

## 感性と悟性の共通の根

### ——ハイデガー『カントと形而上学の問題』と カント『判断力批判』の交差点——<sup>1</sup>

長坂 真澄（群馬県立女子大学）

ハイデガーの『カントと形而上学の問題』（以下「『カント』書」と略）は、カント哲学を超越論的構想力及び超越論的図式論を中心に捉え直す、画期的なものであった。しかし、感性と悟性の共通の根を超越論的構想力に求め、その超越論的構想力に由来する悟性を理性として捉えることを主張する<sup>2</sup>『カント』書の読解は、カントにおける理性の統一的役割を構想力に移し替えてしまう強引さを持っており、その点でカント哲学の建築術に根本的に反する危険を孕んでいた。

本論考の目的は、『カント』書が示した、超越論的構想力を感性と悟性の隠された共通の根とする読解を、『純粹理性批判』とはなく、むしろ『判断力批判』と対照させて再考察することによって、この解釈が持ちうる新たな可能性を探究することにある。というのも、『判断力批判』こそ、『純粹理性批判』が明言していなかった、感性と悟性の共通の根について、一つの可能な答えを与えてくれるように思われるからである。本論で見ると、直感的（ästhetisch）<sup>3</sup>反省的判断が問題となるとき、認識判断の場合におけるような感性と悟性の分断はもはや消滅する。ここでこそ、感性と悟性の共通の根として構想力を語るハイデガーの説が、説得力のあるものとなるように思われるのである。

本論考が辿る行程は以下のとおりである。

まず第1節にて、前提となる議論として、『カント』書が展開する解釈の要点のうち、本論にとって重要な四点を振り返る。その上で、なぜこの解釈が——1950年の第二版序文

<sup>1</sup> 本稿では、以下の略号を用いる（引用文中の強調はすべて原文に属す。〔 〕内の付記は引用者による。なお、カントのドイツ語原文は現代の表記に改めて引用する）。

Kant, Immanuel:

AA: Kants gesammelte Schriften, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaft, Reimer, 1900ff.

KrV: Kritik der reinen Vernunft [1871/1878], in AA, Bd. III, IV.

KU: Kritik der Urteilskraft: in AA, Bd. V.

Heidegger, Martin:

SZ: Sein und Zeit [1927], Tübingen, Niemeyer, 2001.

GA: Gesamtausgabe, Frankfurt a. M., Klostermann, 1975ff.

<sup>2</sup> Cf. GA3 151, 後述。

<sup>3</sup> 本稿では、熊野純彦訳『判断力批判』（作品社、2015年）に倣い、“ästhetisch”を「直感的」と訳す。ここで、「直感的」という語は「美的」という意味をも内包するが、それより広く快・不快の感情に関わるものとする。この訳語には以下の利点がある。第一に、「感」という字により、この形容詞が「直観」（Anschauung）とは異なり「感情」（Gefühl）へと関わること、なおかつ、「感性論」（Ästhetik）に属するものであることが明示的となる。第二に、本論で後述する崇高判断も“ästhetisch”な反省的判断に属すが、これを「美的」反省的判断と訳してしまうと、カントにおいて重要な美の判断と崇高判断の区別（悟性と理性の区別がここには反映されている）が見えにくくなってしまふ。“ästhetisch”を「直感的」と訳すことにより、このような問題が回避できる。

でハイデガー自身が形容するように——「暴力性」（Gewaltsamkeit）（GA3 XVII）を持っているのかを確認する。

より詳しくは、以下の順で議論を進める。

- 1) ア・プリアリな総合判断の存在論的認識（存在了解）としての解釈及び超越論的図式論のハイデガーによる読解
- 2) 自己触発として捉えられる根源的に有限的な時間
- 3) 感性と悟性の共通の根が構想力であるとされること、またそのことが孕む問題
- 4) 構想力をその根源として捉え直される理性及びこの解釈が引き起こす問題

次に第2節にて、『カント』書における解釈が、『純粹理性批判』が論じる認識判断ではなく、むしろ『判断力批判』第1部第1篇第1章「美の分析論」が論じる直感的反省的判断においてこそ、成り立つと考えられる理由を説明する。

その際、以下の順で議論を進める。

- 1) ア・プリアリな総合判断である直感的反省的判断における超越論的図式論（前節1に対応）
- 2) 概念なき図式化において起こる自己触発としての時間（前節2に対応）
- 3) 直感的反省的判断においては〈感じること〉が〈考えること〉と一体であること（前節3に対応）
- 4) 直感的理念を描く構想力（前節4に対応）
- 5) あらゆる規定的判断は反省的判断を前提すること、また、認識判断はその原初的段階においては直感的反省的判断として捉えられること

最後に第3節では、上記の解釈の可能性にもかかわらず、なぜハイデガー自身は、『カント』書での構想力をめぐる議論を、『判断力批判』に積極的に結び付けることをせず、『ニーチェ』の中で想起するにとどめるのかを考察する。

## 第1節 『カント』書が展開する解釈に見られる特徴四点及びその「暴力性」の所在の確認

### 1) ア・プリアリな総合判断の存在論的認識（存在了解）としての解釈及び超越論的図式論のハイデガーによる読解

知られているように、カントの『純粹理性批判』は、ヒュームの経験論によって、客観的必然性を持たない単なる習慣的原理であるとされた因果律を、ア・プリアリな原理として救うことを一つの動機として書かれた。そのためにカントは、ア・プリアリな総合判断（例えば「生起するあらゆるものには原因がある」という命題）が経験可能な対象の範囲内では可能であることを主張し、このような判断が可能となる仕組みを提示した。この仕組みにおいて重要な役割を果たしたのが、超越論的図式論であった。カントにおいて、認識は直観と思考の結合であり（cf. KrV A15;B29f., A50f.;B74f.）、ア・プリアリな総合判断は、非経験的直観と非経験的思考の結合、すなわち、純粹直観と純粹思考の結合として捉える

ことができる。ここで、図式とは何か。それは、カントの言葉を用いて言えば、一方で「概念を感性的にすること」 ([die] Begriffe sinnlich zu machen)、他方で「直観を悟性的にすること〔自らに理解可能にすること〕」 ([die] Anschauungen sich verständlich zu machen) を遂行するものである (KrV A51;B75)。ハイデガーが的確に言うように、図式は「純粹概念の感性化」 (Versinnlichung der reinen Begriffe) (GA3 91, §19) を行う。よって図式こそが、直観と概念の媒介者となり、超越論的図式論のみが、純粹直観 (時間・空間) と純粹思考 (純粹悟性概念) との結合がいかんして可能であることを説明することができるのである<sup>4</sup>。

超越論的図式論を介して可能となるア・プリオリな綜合判断が、ハイデガーの読解において、存在論的認識であるとされるのは、それがいかなる存在者の認識でもなく、むしろ、存在者の認識の可能性の条件、すなわち、存在者の存在に関わるものだからである。確かに、例えば火という原因の結果として煙が出るという認識において、火や煙といった存在者の認識 (現象の認識) と、火や煙の存在自体に関わる因果性の認識 (範疇の認識) は、まったく次元を異にするものである。

よく知られているようにハイデガーは、綜合の働きを構想力に基づける『純粹理性批判』第一版の範疇の超越論的演繹に依拠して説明する。そこでカントは、「直観における覚知」 (Apprehension in der Anschauung)、「構想力における再生」 (Reproduktion in der Einbildung)、「概念における再認」 (Rekognition im Begriffe) という三つの綜合について語るが、これらの綜合のそれぞれが、それはそれで構想力の純粹綜合によるものであることが明らかになる (cf. KrV A98-115)。というのも、上述のように、本質的に異他的である純粹直観と純粹思考を結合することができるのは、媒介者である図式のみであり、そこにこそあらゆる綜合の起源があると考えられるからである。直観における覚知や概念における再認 (超越論的統覚の統一性) も、純粹構想力による綜合を前提しているのである<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> ここで、ハイデガーのカント解釈の独自性が際立つのが、範疇の解釈である。カントを読む限りでは、範疇とは純粹悟性概念であり、Notio とも呼ばれる (カントは Notio を次のように定義している。「概念は経験的概念か純粹概念のいずれかであり、純粹概念は、それがその起源を (感性の純粹形像のうちにはなく) ただ悟性の中に持つかぎり、Notio と名づけられる」 (KrV A320;B377))。しかし、1927-28 年マールブルク大学冬学期講義においてすでに、ハイデガーは、範疇と Notio という二つの純粹悟性概念を表す語を区別していた。この区別は、ハイデガーが、形式的論理学 (一般論理学) と超越論的論理学を区別するカントの立場を高く評価することに由来する。彼にとって、カントの偉大な功績は、何よりも、ア・ポステリオリな綜合判断 (経験的心理学の対象) でも、ア・プリオリな分析判断 (形式的論理学の対象) でもない、ア・プリオリな綜合判断 (超越論的論理学の対象) を見出したことにある。超越論的論理学は、論理学とは言え、単なる悟性の学問 (形式的論理学) とは明確に区別され、直観と結合される思考を扱う (cf. GA25 167f., 252f., 266f., 284f., 301, 322)。範疇は、形式的論理学の枠組みで理解されうものではなく、時間という純粹直観との関わりにおいて初めて実在的なものになるという限りにおいて、空虚な純粹悟性概念 (Notio) から区別されるのである。

<sup>5</sup> よく知られているように、カントは第二版では、綜合の働きを構想力ではなくむしろ悟性に帰す (cf. KrV B133; GA3 §29)。第一版では、純粹構想力が、上記の三つの綜合の根源であると同時に、上記の三つの綜合の一つでもあるという二重の役割を担っていたが、第二版ではその複雑さが修正されるのである。とはいえハイデガーの解釈によるならば、これは、以下のことを意味することになる。超越論的哲学において超越論的構想力なるものを発見したカント自身が、経験的心理学と形式的論理学の二項対立にまだ囚われていた、それゆえ、超越論的構想力が経験的心理学的に (経験的構想力として) 捉えられることを恐れるあまり、形式的論理学的立場へと後退したということである (cf. GA25 318, 429)。

ハイデガーのこうした解釈が説得力を持ちうるとすれば、それは、カントが単に超越論的感性論の内部のみではなく、超越論的論理学の内部でこそ、時間の問題を扱っているからである。つまり超越論的論理学は、単なる悟性の論理学（形式的論理学）ではなく、純粹悟性概念と純粹直観（時間）との結合の仕組みを論じる論理学なのである<sup>6</sup>。

カントは超越論的論理学、超越論的分析論の「原則的分析論」において、範疇（実体性、因果性など）を現象へと適用する際に媒介の働きをなす図式を、超越論的時間規定として記述している。範疇が単なる空虚な枠組みでなく、具体性を持つものとして表象可能となるのは、時間と結合することによってのみである<sup>7</sup>。ハイデガーは言う。図式論こそが、存在論的認識の「生起」（Geschehen）を作動させると（cf. GA3 89）。

超越論的時間規定としての図式が純粹悟性概念（思考）と時間（直観）との媒介者となることができるのは、それが一方では純粹悟性概念と同種性を持ち、他方で時間と同種性を持つからである。カントによれば、範疇と超越論的時間規定が同種であるのは、それらがともに「普遍的」で「ア・プリオリな規則に基づく」からである<sup>8</sup>。しかしハイデガーは、範疇と超越論的時間規定が同種であることは、範疇がすでに時間に根源を持っていること（cf. GA25 211, 365）、あるいは範疇が時間に依存していること（cf. GA3 86）<sup>9</sup>の証左であるとする。

以上で、一方に時間があり、他方に純粹悟性概念があり、これが時間の超越論的規定という図式を介して、範疇を具体的に定義することを可能にすること、よってハイデガーにとって、この超越論的時間規定を産出する産出的構想力こそが、存在者の存在を生み出す

<sup>6</sup> このことは、1927-28年のマールブルク大学冬学期講義から、1935-36年フライブルク大学冬学期講義（『物についての問い』）にいたるまで、ハイデガーによって繰り返し強調されている（cf. GA41 174, 179 et passim.）。

<sup>7</sup> 「したがって、範疇は、図式なくしては、概念のための悟性の機能に過ぎず、いかなる対象をも表象しない」（KrV A147;B187）。範疇は、図式なしには、対象をまったく表象できないのである。例えば、量の範疇（単一性・数多性・全体性）は、時間という形式のもとで加算の手続きを捉えることを可能にする、時間系列という超越論的時間規定によって、初めて具体的に理解可能なものとなる。質の範疇は、時間内容（時間の内容が満たされているか否か）という超越論的時間規定によって、実在性（時間の内容が充実されている）、否定性（時間の内容が空虚である）、制限性（時間の内容が制限されている）として初めて具体的に理解される。さらに、関係の範疇は、時間順序という超越論的時間規定に応じて、実体（実在性が時間のうちで持続する）と属性（実在性が時間のうちで持続しない）、原因性／依存性（規則に従って事象が時間のうちで継起する、すなわち、Aが起これば常にBが起こる）、相互性（時間において、複数の事象が同時に存在し、互いが互いの原因となって作用し合う）として初めて具体的に表象可能となる。最後に、様相の範疇は、時間総括という超越論的時間規定によって、可能性（対象が或る任意の時間において知覚と結合しうる）、現実性（対象が或る特定の時間に現実的な知覚と結合している）、必然性（対象がすべての時間において知覚と結合している）として、初めて具体的に表象される（cf. KrV A145;B184;GA3 104）。

<sup>8</sup> 「ところで、超越論的時間規定は、（この規定の統一性を構成する）範疇と同種のものである。それは、超越論的時間規定が、普遍的であり、ア・プリオリな規則に基づくものである限りにおいて、そうなのである」（KrV A138;B177f.）。

<sup>9</sup> ハイデガーは、この箇所、範疇は「純粹直観に依存している」（auf die reine Anschauung angewiesen）としている。

ものであることが確認された。

## 2) 自己触発として捉えられる根源的に有限的な時間

このことはハイデガーにとって、超越論的構想力からこそ時間が湧出することを意味している。ハイデガーは、時間が超越論的構想力から発する「仕方」(Art und Weise)が、自己触発として捉えられることに着目する (cf. GA3 173)。この自己触発という考え方からこそ、ハイデガーは、カントの時間論が根源的に有限性を捉えることに成功していると見るのである。

カントは、時間を「心の変様」(Modifikation des Gemüts) (KrV B291)として捉える。それは、心が、何らかの存在者を受け取ることによってこうむる変様ではない。それは、「いかなるものでもないもの」を受け取ることによる変様である。ハイデガーはそれを、「現前するもの」(ein Anwesendes)を「受け取ること」(Hinnehmen)から区別する (cf. GA3 188)。時間とは、存在者ではなく、存在が与えられていることによる心の変様なのである。いかなるものも外部から与えられているわけでもなく心自身の変様することから、カントはこれを、心の心自身による触発と捉える<sup>10</sup>。ハイデガーはこれを、「純粋な自己触発」(reine Selbstaffektion) (GA3 188; cf. KrV A77; B102)、「自己が自己へと関わること」(Sich-selbst-angehen)であると言う。これは1927-28年マールブルク大学冬学期講義では、「気遣い」(Sorge)と結び付けられ (cf. GA25 397)、『カント』書では、「主観性の本質的構造」と捉えられている (GA3 189)。

ハイデガーにとって、この自己触発こそ、時間を、そして存在を、根源的に有限的なものとして捉える可能性を開く概念である。というのも、これこそ、(伝統的形而上学において独断的に措定されるような)無限の時間——永遠——の派生形態ではない形で、有限的な時間を捉えることを可能にするからである<sup>11</sup>。カント自身は、ハイデガーの言う意味での根源的な時間と派生的な時間(「通俗的な」時間)という区別をしているわけではないが、ハイデガーはここに、根源的な時間性の記述を見出すのである。

## 3) 感性と悟性の共通の根が構想力であるとされること、またそのことが孕む問題

さらに、ハイデガーは、純粋直観、純粋悟性の働きそのものが、純粋構想力によるものであるとする<sup>12</sup>。純粋直観(すなわち時間)が構想力によるものであることは、カントが時

<sup>10</sup> 「もし我々が外部感官について、我々が外部的に触発される限りにおいてのみ、外部感官を通して客観を認識するのだということを認めるならば、我々は内部感官についても、以下のことを承認しなければならない。つまり、我々が内部的に我々自身によって触発されるようにのみ、内部感官を通して我々自身を直観するということを、である」(KrV B156)。

<sup>11</sup> 『存在と時間』においてハイデガーは、「時間が『無限』であるという通俗的な時間解釈の主要なテーゼ」(SZ 424)を、根源的に有限な現存在の時間性から派生するものとして記述しようとする。この有限的な時間の理解をカントの時間論のうちに見出す試みこそ、『存在と時間』の(未刊となった)第2部第1篇の課題であった (cf. SZ 427, Fußnote 4)。『カント』書における時間の議論は、この『存在と時間』以来の課題の延長線上に捉えられなければならない。

<sup>12</sup> 直観と悟性の媒介者としての構想力という考え方自体は、アリストテレスに遡る。Cf. 齋藤元紀「カントの現象学的解釈——超越論的時間地平の発見」『ハイデガー読本』、法政大学出版局、2014年、37-46頁。

間を「構想的存在」（ens imaginarium）と呼んでいることから、裏付けられるとされる<sup>13</sup>。純粹悟性の働きが構想力によるものであることは、カントが図式論を「悟性の所作」と呼んでいることから、看取されると言う<sup>14</sup>。ここで超越論的統覚も時間性を持つのかということが問題になる。ハイデガーは 1927-28 年マールブルク大学冬学期講義にて、超越論的統覚（純粹悟性の働き）と時間（純粹直観）がつながっていることを示して初めて、自らの共通の根についてのテーゼが成り立つ、と認めており（cf. GA25 359）、それは後の『カント』書において詳細に検討される。カント自身は、超越論的統覚と時間を切り離しているが、ハイデガーは、超越論的統覚は、通俗的な意味での時間から切り離されるのみであり、根源的には時間的であるのだと主張する<sup>15</sup>。

以上のようなハイデガーのカント解釈は、その独自性によって、カント哲学からの乖離を告知している。確かに、ハイデガーがその炯眼をもって指摘するように、ア・プリオリな能力としての構想力の発見は、カントの偉大な功績である。しかし、他方で、彼が認識の限界設定をなすという巨大な課題を持っていたことも、忘れることはできない。思考と直観が分断されているからこそ、空虚な思考（直観と結合しない思考）と認識（直観と結合した思考）の区別ができる。言い換えれば、カントにとって、感性と悟性の根は、「我々にとって未知」（uns unbekannt）（KrV A15;B29）にとどまる。もしもこれが認識にもたらされてしまうならば、それはもはや、カント哲学が設定する認識の限界を超えることになる。

#### 4) 構想力をその根源として捉え直される理性及びこの解釈が引き起こす問題

ハイデガーは、感性と悟性の根を構想力に求めるだけでなく、さらに、理性をも構想力

<sup>13</sup> KrV A291f.;B347f.;cf. GA3 143. ここでハイデガーは、カントにおける四つの無の分類（cf. KrV A290;B347ff.）を参照している。第一に、対象のない空虚な概念としての無があり、これをカントは「思考的存在」（ens rationis）と名付ける。その例は「本質体」（Noumena）である。第二に、概念に対する空虚な対象としての無があり、これをカントは「欠性的無」（nihil privativum）と呼ぶ。カントの挙げる例は、影、寒気である。第三に、対象のない空虚な直観としての無が挙げられ、これが「構想的存在」であり、その例が、純粹空間及び純粹時間である。第四に、概念のない空虚な対象としての無が、「否定的無」（nihil negativum）と呼ばれ、自己矛盾する概念の対象がその例とされる。カントは言う。「直観の単なる形式」、すなわち時間と空間は、「実在的なものなくしては、いかなる客観も形成しない」（KrV A292;B348）。

<sup>14</sup> ハイデガーは、カントの語る、「これらの図式における悟性の所作」（das Verfahren des Verstandes mit diesen Schematen）（KrV A140;B179）、「我々の悟性のこのような図式論」（Dieser Schematismus unseres Verstandes）（KrV A141;B180f.）といった表現に着目する（cf. GA3 151）。

<sup>15</sup> カントにおいて、純粹統覚（「私は考える」）は、内容のない単なる形式であり、時間性を持たない。この形式に時間性を帰すことは、これを実体化することであり、カントが純粹理性の誤謬推理としたもの（cf. KrV A341-405;B399-431）へと陥ってしまう危険を持つ。ハイデガーはこの点を熟知の上で、カントが「私は考える」と時間性を引き離すのは、ただ、非本来的な時間性、すなわち内時間性として時間を捉える場合においてのみだと主張する。つまり、根源的で本来的な時間性として時間を捉えるなら、純粹統覚（「私は考える」）は時間的なものであり、その際、統覚は実体化されないため、誤謬推理に陥ることはないとされるのである（cf. GA3 192f.）。なお、カントもハイデガーも、「純粹統覚」と「超越論的統覚」を、ともに超越論的な統一を行う統覚を表現する二つの捉え方として用いており、事柄としては同一視しているように見受けられるが、中島義道は、「純粹統覚」と「超越論的統覚」を峻別し、後者を時間的なものとして捉えている点で、議論の過程こそ異なるものの、結果的にはハイデガーの議論と親和性を持っており、興味深い（cf. 中島義道『カントの時間論』[2001年]、講談社学術文庫、2016年、33頁以下）。

から発するものであるとする解釈を展開する。カントにおいては、悟性が概念を通して客体の多様を統一するだけでなく、理性がそれら概念の多様を、理念を通して統一する<sup>16</sup>。ハイデガーは、この理性がもたらす統一をも、超越論的構想力の根源的統一の働きに由来するものと捉えるのである。

この主張へと至るハイデガーの論拠を整理するならば、次のようになるだろう。第一に、「理性が『一個の全体の形式』（“Form eines Ganzen”）（KrV 832;860）を表象する」（GA3 152）からこそ、つまり理性が統一をもたらす働きを持つからこそ、それに応じて悟性にも、統一をもたらす働きが付与される。第二に、この理性が、そもそもこの理念の「構築」（das Bilden）において「構想的性格」（Einbildungscharakter）を持っているからこそ、理性の統一の働きに応じて表象の統一を行う悟性も、構想的性格を持つ。言い換えれば、ここでハイデガーが言わんとしているのは、理性とは、構想力にほかならないということである<sup>17</sup>。ここで、我々は疑問を抱かずにはいられない。推論することと、構想（想像）することとは、重ね合わされてよいのか。カント自身においては、（思考の規則に従う）推論と、（思考の規則から自由である）構想とは、異なる営みである。カントは、理性が構築する超越論的理想は、構想力の産物（つまり「感性の理想」）ではないと明言している<sup>18</sup>。ハイデガーはしかし、この点を踏まえた上で、自らの解釈を擁護する。いわく、カントは「超越論的理想が経験的に生産的な構想力の所産であること」を拒否しているのみであり、それが「超越論的構想力」の所産であることは、排除してはいない（cf. GA3 152）。

ここに我々は、『カント』書における解釈の最大の魅力と同時に最大の「暴力性」を見出す。超越論的理想が認識の彼方に位置するということは、カント哲学にとって決定的に肝要である。ところがそれは、ハイデガーの解釈においては、認識能力の一つである超越論的構想力の産物となってしまうのである<sup>19</sup>。これは、超越論的弁証論を超越論的感性論と超越論的分析論（とりわけ超越論的図式論）に回収してしまうことであろう。

<sup>16</sup> 「悟性は客体における多様を、概念を通して統一する。それと同様に、理性は理性の側から、概念の多様を、理念を通して統一する」（KrV A643;B672）。

<sup>17</sup> ハイデガーによれば、悟性の「構想的性格」は、悟性を理性として捉えることにより、より明らかになるとされる。「我々が、今到達された悟性の本質規定から出発して、純粋な自己意識に、またその本質にさらに近づこうと試み、悟性を理性として捉えようとするなら、そのとき、純粋思考が持つ構想という性格は、より明確なものとなるだろう」（GA3 151）。なぜなら、そもそも理性は、「理念の構築」（[das] Bilden der Idee）をなす能力であるからだとされる（cf. GA3 152）。このハイデガーの議論では、そもそも理性が構想力であるという主張の内容そのものが前提されているように思われる。

<sup>18</sup> 構想力の産物としての理想は、たしかに「可能な経験的直観の到達しえない範型」であるが、「定義や吟味ができないようないかなる規則をも与えない」（KrV A570;B598）。これに対し、「理性が理性の理想をもって意図するのは、ア・プリオリな規則に従って、網羅的に規定すること」であり、理性の意図する対象は、経験はそれに十分な条件を提供しないとはいえ、「原理に従って網羅的に規定されるはずの」ものである（KrV A571;B599）。

<sup>19</sup> 『カント』書から出発して超越論的仮象の問題を考察することの必要性を示唆している論考として、以下が挙げられる。秋富克哉「深淵としての構想力」『ハイデgger『存在と時間』の現在』、南窓社、2007年、132-152頁。また、『カント』書における超越論的理想の措定の危険を指摘しているものとして、以下の論考が考察のきっかけとなった。Franck Pierobon, « Le malentendu Kant/Heidegger » in: *Revue ÉPOKHÈ, Le statut du phénoménologique*, n° 1 (1990), pp. 127-202.

## 第2節 『カント』書における解釈を『判断力批判』『美の分析論』が論じる直感的反省的判断から再理解する試み

さて、以上に見たように、ア・プリオリな総合判断を存在論的認識（存在了解）として捉えるハイデガーの解釈は鮮やかなものだが、構想力を感性と悟性、さらに理性の根源とする説は、カントの設定した認識の限界を超えている。しかし、そもそも認識が問題とならない場合ではどうだろうか。ここで思い起こされるのが、カントが『判断力批判』第1部で扱う直感的反省的判断である。

### 1) ア・プリオリな総合判断である直感的反省的判断における超越論的図式論（前節1に対応）

カントが『判断力批判』第1部において直感的反省的判断として論じているのは、美しいという判断、大・中・小であるという判断<sup>20</sup>、崇高であるという判断である。カントは、この直感的反省的判断がア・プリオリな総合判断であることを強調する。まずこの判断は、主語（例えば或る直観の対象）が、主観的に、主語の中には全く含まれていない述語（快・不快の感情）へと包摂されるという意味において、総合判断である<sup>21</sup>。また、直感的反省的判断がア・ポステリオリな総合判断だとすると、それはいかなる主観的普遍性をも持ちえず、感覚判断と同じ、個々人の経験に依存する判断となってしまう。カントは美の分析論において、美の判断を、質、量、関係、様相の観点から、関心なき適意（質）、主観的普遍性（量）、目的なき合目的性（関係）、主観的必然性（様相）によって特徴づける。このうち美の判断が備え持つ主観的普遍性、主観的必然性は、この判断がア・プリオリでなければ成り立たないことの証左であるとされる<sup>22</sup>。以上の二つの理由により、直感的反省

<sup>20</sup> カントは「大きさ」（Größe）の数学的判定と直感的判定を区別する。大きさの数学的判定においては、最大量が存在せず、無限の進行が行われる。大きさの直感的判定においては、最大量がある。カントによれば、「大」（groß）は純粹悟性概念ではない。しかし感官による直観でもなく、むしろ理性概念でもない。言い換えれば、「大」は悟性（思考）の対象ではなく、感官の対象でもなく、理性による推論の対象でもない。「これは大きい」と判断するとき、主語「これ」は述語「大きい」に包摂されるが、この述語が悟性概念ではないということは、この判断が、規定的判断（主語を包摂させるための述語が概念としてすでに与えられている判断）ではないことを意味する。カントによれば、「大」は「判断力の概念」（AA V 248, KU §25）なのである。しかしここで、疑問が浮かぶ。理性は理性概念（理念）を形成し、悟性は悟性概念を形成するが、判断力は単なる包摂を行うのみの能力であるから、判断力が概念を形成するとは言えないのではないか、という疑問である。しかし、実は、判断力が概念を形成することは可能である。なぜなら、すでに与えられているような述語概念がない場合に、それを模索するのが反省的判断だからである。直感的反省的判断は、概念を感性によって模索し形成しようとするものだと考えることができるだろう。ただしそれは、客観的概念ではありえない。

<sup>21</sup> 「趣味判断〔つまり美の判断〕が総合的判断であるということは、たやすく洞察できる。なぜなら、趣味判断は、客体の概念や客体の直観さえも超えて、まったく認識でさええないような或るもの、すなわち、快（或いは不快）の感情を、直観に述語として付け加えるからである」（AA V 288, KU §36）。

<sup>22</sup> 「（表象に結び付けられた自らの快という）述語は、経験的である。にもかかわらず、趣味判断は、あらゆる人に同意が要求される限りにおいて、やはり、ア・プリオリな判断なのである、或いは、そのように捉えられることを求めている」（AA V 288f., KU §36）。直感的反省的判断をア・プリオリな総合判断と特徴づけるカントに対して、これをア・ポステリオリな総合判断であるとする



的判断は、ア・プリアリな総合判断なのである。

ここで以下の確認をしておきたい。直感的反省的判断において働く構想力は、経験的構想力ではないということである。カント自身がそれを超越論的構想力とは命名していないものの、あくまで超越論的哲学が視野に置かれているという意味において、我々はこれを（広義の）超越論的構想力と呼ぶべきである。ただしここで「超越論的」という語は、認識の成り立ちに関わるという意味での狭義の語法（cf. KrV A11f.;B25）から区別されるものとする。カントは言う。「かくして、判断力批判の課題は、超越論的哲学の一般的問題に属することになる。つまり、いかにしてア・プリアリな総合判断は可能であるのか、という問題である」（AA V 289, KU §36）。つまり、ハイデガーが『カント』書で問うた、存在了解としてのア・プリアリな総合判断がいかにして可能かという問題は、純粹認識判断においてのみでなく、直感的反省的判断においても解明されることが期待できるのである。

では、この判断においては、ハイデガーが純粹認識判断において見てとった、存在論的認識をあらわにする超越論的図式論は、展開されているだろうか。カント自身は『判断力批判』において、「図式」という言葉を多用しない。彼は、認識判断において概念を直観化する「図式」に対比させて、美の判断においては、「象徴」の概念を導入する。知られているように、カントによれば、直観化つまり「感性化」（Versinnlichung）には、「図式」と「象徴」の二通りがある。「図式」は、概念に対して直観が与えられるとき、「象徴」は、理念に対していかなる直観も与えられようがないため、その代用として、その理念と規則において類似している対象の直観が与えられる場合に、用いられる術語である（cf. AA V 351ff., KU §59）。また、認識判断において、「図式的」（schematisch）、「機械的」（mechanisch）に行われる、主語の述語への包摂に対して、直感的反省的判断においては、包摂が「技術的」（technisch）、「技巧的」（künstlich）になされるとも論じられている（cf. AA XX 213f.）。このように、認識判断において用いる「図式」という語を、直感的反省的判断においては用いないように注意を払っているように見えるカントであるが、時折、この直感的反省的判断においても、「図式」という言葉をなおも用いている。その例が、第35節にて、この判断についてカントが説明しながら用いる、「構想力がいかなる概念もなくして図式化すること」（daß die Einbildungskraft ohne Begriff schematisiert）（AA V 287, KU §35）という表現である。認識判断の場合は、規定された概念の感性化として、図式が構想力により産出される。対して、直感的反省的判断においては、概念なき図式化、つまり、未規定的な概念の感性化として、図式が構想力により産出されるのである。実際カントは『判断力批判』第一序論「VIII 判定能力の感性論について」にて次のように説明している。判断力における構想力と悟性の関係は、認識判断のように客観的に考えられるのみならず、主観的にも考えられる。後者の場合、構想力と悟性の関係は、一方が他方を促進したり妨害したりすることで心が触発されることによって、「感覚可能」（empfindbar）になる。この感覚は、「判断力を通して悟性概念の感性化に主観的に結び付けられている」（subjektiv mit

---

反論は可能であろう。ただし、ア・ポステリオリな総合判断は経験的心理学が扱う問題であり、超越論的哲学の問題ではなくなってしまうため、カントはこれを扱わないのである（cf. AA V 296ff., KU §41「美に対する経験的関心について」）。

der Versinnlichung der Verstandesbegriffe durch die Urteilskraft verbunden) (AA XX 223)。これはまさに、上に見た、ハイデガーが図式を説明する際に用いた「純粋概念の感性化」

(Versinnlichung der reinen Begriffe) (GA3 91, §19, 再掲)という言葉と重なり合うのである。

この概念なき図式化（未規定的な概念の感性化を可能にすること）は、構想力によって経験的になされるものではなく、ア・プリオリになされるものである。この限りにおいて、

（カント自身は「超越論的図式論」という語を認識判断の場合に限って用いているとはいえず）我々は、この概念なき図式化についてのカントの教えを、広義の超越論的図式論と呼ぶことができる<sup>23</sup>。これこそまさに、ア・プリオリな総合判断はいかにして可能かという問いに答えるものである。ここで図式は概念の感性化を行うとされるが、この概念それ自体は未規定的であり、概念の形式のみがある。よって、概念の図式化ではなく、概念の形式の図式化がなされていると考えるべきである<sup>24</sup>。では、ここに純粹直観はあるのか。それを次に検討する。

## 2) 概念なき図式化において起こる自己触発としての時間（前節2に対応）

重要であるのは、直感的反省的判断においては、この判断が「S=P」——例えば「これは美しい」（Das ist schön）——という形をとるにもかかわらず、主語である直観の対象と、述語である快・不快の感情の結合が問題となっているのではない、ということである。直観において供される存在者は、この判断のきっかけではあれ、構成要素ではない。快・不快の感情は、構想力の対象であり、それによって心が触発される時、心は心自身を感じているとされるのである。カントは言う。「〔表象が快と不快の感情に対して持つ〕関係を通しては、客観における何ものも、指示されてはいない。この関係においては、主観が、表象を通して触発されるがままに、自ら自身を感じているのである」（AA V 204, KU §1）。

直感的反省的判断（例えば美しいという判断）において、感性が何らかの存在者を受け取り、悟性がそれについて考えるという役割分担は消滅する。そもそも感性が外部から受け取る存在者が、心を触発するのではない。これこれの存在者を外部から受け取るとは、感性によって直観するということである。感性的直観によって受け取られたものは、悟性概念と結合して、認識判断となる。しかし、直感的反省的判断において、感性的快とは異なる快が感じられるとき、その快は、認識されるのではなく、構想（想像）されている。構想されるものは、実在するものではない。実在する何らかの存在者から触発されるのではないにもかかわらず、私の心は変様を受ける。構想力の働きにより、心は自らで自らを触発しているのである。

<sup>23</sup> この語の用法は、リシールに見られる。リシールは、論考「思考の現象学的起源」（1980）において、『判断力批判』における「概念なき図式化」に着目し、『純粹理性批判』での超越論的図式論は、むしろ『判断力批判』の「概念なき図式化」から再構築されるべきであるとし、後者を「現象化の超越論的図式論」（schématisation transcendantale de la phénoménalisation）と名付けている。Cf. Richir, Marc, « L'origine phénoménologique de la pensée » (in: *La liberté de l'esprit*, n° 7 : le Cogito, Paris, Balland, octobre 1984, pp. 63-107), p. 87.

<sup>24</sup> すなわち、目的の概念を欠いた、合目的性という、概念の形式のみが、図式化されるのである。このような理解を促すのは、リシールのカント読解である。Cf. Richir, « L'origine phénoménologique de la pensée », op. cit., p. 79sq. ; *L'écart et le rien - Conversations avec Sacha Carlson*, Grenoble, Millon, 2015, p. 83.

かくして、直感的反省的判断は心の心による自己触発であるということ、そこでは、（見かけに反して）経験的直観も、また、概念も関わることなくして、図式化が遂行されるということが確認された。では、ここにおいて、純粹直観はなされているのか。我々の考えでは、なされている。というのも、いかなる存在者をも受け取るのではない心の変様として自己触発がなされている限りにおいて、この自己触発は、ハイデガーが捉えた意味での時間の湧出にはかならないからである。カント自身は『判断力批判』において、時間を体系的には論じていないが、時間についての記述が散見されないわけではない。ここで、美の判断（構想力と悟性の共働）ではなく、崇高判断（構想力と理性の共働）について語られる章（第1部第1篇第2章）における、時間への言及を参考に、美の判断における時間について考察してみたい<sup>25</sup>。

崇高判断について説明するに当たって、カントは、大・中・小であるという判断について述べている。崇高判断は、この大が比較を絶して大である時、すなわち（数学的にではなく）直感的に無限である時に、下される判断である。ここで、直感的に捉えられる意味での有限と無限が区別できる。さらにカントは、この崇高判断において、「把握」（*Auffassung*）と「総括」（*Zusammenfassung*）という二つの構想力の働きを区別する。把握とは、構想力の「前進」運動であり、総括とは、構想力の「背進」運動であるとされる。構想力による把握における前進は、「時間的条件」に従うとされるが、この時間的条件とは「時間的継起」である。それに対して、構想力による総括における背進は、時間的継起において前進的に対象を把握するのではなく、すでに把握されたものを一つの瞬間へと総括するという意味において、この時間的継起という条件に「暴力」（*Gewalt*）を課すものであるとされる<sup>26</sup>。この暴力は、総括されるものが大きければ大きいほど、顕著となる。よって、崇高判断においては、構想力は自らに過大な暴力を課すことになる<sup>27</sup>。

<sup>25</sup> 「美の分析論」の内部でも、時間についての言及がないわけではない。例えばエスクーバはカントが第12節（「趣味判断はア・プリオリな根拠に基づく」）で用いる「滞留」（*Verweilung*）という語に着目し、そこに時間論の可能性を見出している。Cf. Escoubas, Éliane, *Imago Mundi - Topologie de l'art*, Paris, Galilée, 1986. p. 41. カントはその箇所ですべて述べている。「我々は、美しいものの観賞において、滞る（*weilen*）。というのも、この観賞は、自ら自身を強め、再生産するからだ」（AA V 222, KU §12）。ハイデガーの『カント』書に精通した上で『判断力批判』を論じるエスクーバは、ここから次のように述べている。「第12節で言及されるこの *Verweilung* は、おそらく、主観の『活動』、それゆえ（主観に固有なものとしての）『内部感官』の一つの可能性、すなわち、主観の自己-触発としての時間の可能性である」。ただしエスクーバはここで、この滞留の「間」（*Weile*）をむしろ「時間の中断」と捉えている（Escoubas, *Imago Mundi*, op. cit., p. 41.）。

<sup>26</sup> 「空間の（把握としての）測定は、同時に、その空間を描くことである。したがってそれは、構想における客観的運動であり、前進である。それに対して、多性を統一性へと総括すること——思考の統一性ではなく、直観の統一性へと総括すること——、したがって、継続的に把握されたものを或る瞬間へと総括することは、背進である。この背進は、構想力の前進における時間的条件を撤廃し（*wieder aufheben*）、同時存在を直観的に表示する。それゆえ、総括は、（時間的継起は、内感と直観の条件であるので）構想力の主観的な運動である。この運動を通して、構想力は、内感に暴力をふるう。この暴力は、構想力が一つの直観へと総括する量（*Quantum*）が大きければ大きいほど、顕著なものであるはずである」（AA V 258f., KU §27）。

<sup>27</sup> リシールはここに、思考ではなく直観がなす、多様の統一性への集約があると指摘している（Richir, Marc, « La rencontre phénoménologique de l'instituant symbolique dans l'analytique kantienne du sublime » (in: *Phénoménologie et institution symbolique - Phénomènes temps et êtres II*, Grenoble, Millon, 1988, p. 91-131), p. 102sq.)。ロゴザンスキーは、やはりこの箇所の読解から、構想力の暴力を、総合そのものが持

ここで、直感的な大きさの判定における無限（すなわち直感的な意味での最大量<sup>28</sup>）にまだ達しない範囲内の（すなわち直感的に有限な）大・中・小であるという判断を考えるならば、この判断は、大きな暴力を伴う総括にはいたらない把捉、つまり時間的継起に従う前進とその平和的な総括と考えることができる。つまり、崇高判断にはいたらない直感的反省的判断における自己触発は、（無限の時間という形而上学的前提に依拠しない）有限な時間の湧出にほかならないと考えられる。認識判断において量の範疇が現象へと適用される際、『純粹理性批判』の超越論的図式論によれば、時間系列としての超越論的時間規定が図式として働くのであった。大・中・小の判断における構想力の把捉は、認識判断における時間系列とよく似ているように見えるが、主観的、直感的に捉えられるものである限りにおいて異なる。主観的であるにとどまる直感的反省的判断において、構想力は、客観的な時間として構成される以前の、自己触発としての時間を湧出するのだと考えられる。

以上により、ア・プリアリな総合判断である、崇高判断にはいたらない直感的反省的判断の解明が、広義の超越論的図式論を展開していること、そこでは心の心による自己触発が認められること、それは根源的に有限的な時間の記述であることが確認された。カント自身は上述のように、根源的時間性と派生的時間性を区別はしないが、ハイデガーによるこの区別は、『判断力批判』における、認識以前の心の変様を根源的時間性と捉えることにより、可能となると考えられるのである。

### 3) 直感的反省的判断においては〈感じること〉が〈考えること〉と一体であること（前節3に対応）

ここでさらに、直感的反省的判断においては、感性と悟性が分断されず、一体となっていることを示したい。カントは、上述のように、『判断力批判』第一序論「VIII 判定能力の感性論について」において、構想力と悟性が、一方が他方を促進したり妨害したりすることにより、構想力と悟性の関係が感覚可能になるとするが、それに続けて、さらに以下のように述べている。「さて、この感覚は、客体の感性的表象ではない。しかしそれでもこの感覚は、やはり、判断力によって悟性概念の感性化〔つまり図式の働き、上述〕と主観的に結びついている限りにおいて、かの能力〔判断力〕の作用を通して触発される主観の状態の感性的表象として、感性のうちに数えられることができる。また、判断は直感的、すなわち感性的〔…〕と名付けられうるのである。それは、判断することが（すなわち客

---

つ暴力と捉える（cf. Rogozinski, Jacob, « Le don du monde »(in: *Du sublime*, Belin, 1988, p. 179-210), p. 194)。彼は構想力の暴力を強調するが、この暴力は、むしろ、理性が構想力に課すからこそ、構想力が自らに課さざるをえないものであると我々は考える。なお、ロゴザンスキーの議論については、以下の論考が論じている。宮崎裕助「カント 超越論的構想力と構想 - 暴力」『続・ハイデガー読本』、法政大学出版局、2016年、87-94頁、宮崎裕助『判断と崇高 ——カント美学のポリティクス』知泉書館、2009年、n22頁。

<sup>28</sup> 上述のように、カントは、大きさの数学的判定と直感的判定を区別する。数学的判定においては、最大量が存在しないため、より大きな量へと無限に進行しうる。それに対して、直感的判定においては、比較を絶する大という最大量がある。理性が形作る無限の理念を、構想力は、直感的に無限なものとして構想しようとする。

観的には）（上級認識能力一般としての）悟性の行いであって、感性の行いではないにもかかわらず、そうなのである」（AA XX 223）。

ここでカントは、判断することは、本来は客観的なものとして、悟性の働きに属し、感性の働きではないはずなのだが、直感的反省的判断は、感性的なものとして名付けられると言っている。実際、何かを美しいと感じることと、何かを美しいと思う／考えることを、区別することはできない<sup>29</sup>。直感的反省的判断において、感じることと考えることは一体をなしているのである。ここで構想力は、〈感じること〉と〈考えること〉が分離する以前の段階で働いていると考えることができる<sup>30</sup>。言い換えれば、ここでこそ、ハイデガーが言うように、構想力が、感性と悟性の共通の根となっていると考えられるのである。

#### 4) 直感的理念を描く構想力（前節4に対応）

ここでさらに、ハイデガーが『カント』書で語る、超越論的理想を超越論的構想力の産物として捉えるという解釈が、直感的反省的判断において成り立つか否かを検討したい。ここで想起されるのが、美の理想について語られる第17節と、直感的理念について語られる第49節である。ここでは第49節に着目する<sup>31</sup>。

第49節においては、理性理念の対であるような「直感的理念」（*ästhetische Idee*）が語られている。この理念は、多くを考えさせる構想力の表象であるにもかかわらず、いかなる規定された思考も、つまりいかなる概念も、それに合致することができないものであるとされる。それゆえ、いかなる言語も、完全にはこの理念に到達することがなく、またこの理念を理解可能なものにすることもできない。このような直感的理念は、理性理念に対する我々の欲望に、感性的な形式を与えるとされる（cf. AA V 314）。

認識判断の場合は、真偽、つまり、真理と仮象との区別があり、超越論的理想は仮象であるし、いわんや、真なる認識判断の範囲内では、超越論的構想力が超越論的理想に到達するとは言うことはできない。それに対して、直感的反省的判断においては、真理や仮象といったことはまったく問題にならない。例えば何かを美しいと判断することは、その美

<sup>29</sup> 同様に、何かを大・中・小であると感じることに、そのように思う／考えることも、区別できない。これに対して、例えば「これは赤い」という認識判断を考えてみると、赤いと感じること（外部感官を通して感性的直観を持つこと）と、赤いと思うこと（赤の概念を思考において持つこと）は、別の事柄であることがわかる。

<sup>30</sup> リシールは、上掲の論考「思考の現象学的起源」において、『判断力批判』における「概念なき図式化」においては、『純粋理性批判』の図式論では明らかではなかった思考の起源が示されていると考える。美しいという直感的反省的判断においては、判断すなわち「思考」と、美を「感じる」との区別不可能性があると彼は論じ、そこに思考の現象学的な起源を見出すのである。「直感的判断においては[...] 感覚 (sensation) はすでに判断している（つまり、すでに思考している）。それはこの判断が、対象に無媒介的に関わる限りにおいてである。この判断の効果は、翻って、この感覚そのものなのだ。[...] ここには、考えることと感じることとの原初的な区別不可能性がある」（Richir, «L'origine phénoménologique de la pensée», op. cit., p. 78）。リシール自身は、この読解をハイデガーとは独立に、自らのカント哲学の現象学的再構築として行っている。

<sup>31</sup> 第17節によれば、構想力が構想する美の理想は、それが美の理想を個において具現するものである限りで、純粋な美の判断が持つような主観的合目的性としての自由を失い、概念として規定可能な客観的合目的性（すなわち道徳性）へと固定されることとなる（cf. AA V 235ff.）。よって、それはもはや直感的反省的判断の領域を超え、論理的反省的判断であるような（cf. AA XX 235, 250）、目的論的判断につながるものである。これについては、本稿第3節で立ち戻りたい。

しさがそもそも実在するものではない限りにおいて、錯覚であるとか錯覚でないとかいうこと自体が該当しない。それは構想（想像）の対象なのである。ハイデガーが『カント』書において超越論的構想力の産物と捉えた超越論的理想は、これを直感的反省的判断において構想力が構想する（理性理念の対としての）直感的理念として捉えるならば、意味を持つはずである。そこでは、超越論的仮象を取り除くという超越論的弁証論の課題は不要となるからである。

#### 5) あらゆる規定的判断は反省的判断を前提すること、また、認識判断はその原初の段階においては直感的反省的判断として捉えられること

さて、この直感的反省的判断こそ、そもそも、あらゆる規定的判断が前提するものであると我々は考えることができる。なぜなら、既存の概念を前提とし、それを述語としてその下に主語を包摂する規定的判断は、概念を前提することなく模索する反省的判断なくしては、確立されえないからである<sup>32</sup>。また、カントは言う。あらゆる認識判断は、その原初においては、直感的反省的判断であったと<sup>33</sup>。

かくして、あらゆる認識判断の起源には直感的反省的判断があるならば、そしてこの直感的反省的判断においては、感性と悟性とが、構想力を根として一体となっているならば、ハイデガーの『カント』書での解釈が、ここにおいてこそ、精彩を放つと考えられるのである。

### 第3節 超越論的構想力としての理性 —— 後景へ退くカント

さて、これまで我々は、『カント』書で展開される解釈（1. ア・プリアリな総合判断における超越論的図式論、2. 自己触発としての根源的に有限的な時間、3. 感性と悟性の共通の根としての構想力、4. 超越論的構想力により産出される理想）が、『純粋理性批判』における認識判断よりもむしろ、『判断力批判』「美的分析論」における直感的反省的判断と重ね合わせるときにこそ、成り立つと考えられることを確認した。しかし、ハイデガー

<sup>32</sup> 『純粋理性批判』での言葉を用いれば、「理性の必当的使用」（特殊を普遍に包摂すること）は、「理性の仮設的使用」（特殊から出発して、それが包摂されるべき普遍を探すこと）によってまず普遍が模索されることがなければ、そもそもなされえない。Cf. KrV A646f.;B674f.

<sup>33</sup> 『判断力批判』序論（VI「快の感情が自然の合目的性の概念と結合していることについて」）において、カントは、経験から得られた別々の自然法則が、一つの原理の異なる現れ方であることが発見される際の快について語っている。ここで我々が想起するのは、物が重さを持っているという現象と、衛星が惑星の周りを回るといふ現象が、万有引力の法則という一つの原理の二つの現れ方であることが発見される際の快である。カントは言う。「最もありふれた経験であっても、このような快なしには、不可能であったらう。それゆえにのみ、この快は、次第に、単なる認識と混ざり合い、もはや特に気づかれなくなったのである」（AA V 187）。つまり、何らかの認識が獲得される際に、それは快の感情（直感的反省的判断において感覚される感情）と混じり合っていた、というだけでなく、そもそもそのような快の感情によって牽引されることなしには、人間は認識へと導かれることがないということである。この点に注意を促しているのはデリダである。Cf. Derrida, Jacques, « Economimesis » (in: Agacinski, Sylviane, et al., *Mimesis des articulations*, Flammarion, 1975, pp. 55-93), p. 65.

自身は、『カント』書での解釈を『判断力批判』に結び付けることをしていない。かろうじて『ニーチェ』に所収の講義「芸術としての力への意志」（1936-37年冬学期講義）の一節がその可能性を示唆してくれるのみである。この節でハイデガーは、カントによる「美の分析論」（質・量・関係・様相からの考察）のうち、質からの考察、すなわち、美は関心なき適意として表象されることに触れ、これは——ニーチェ自身のカント理解に反して——美を陶醉という面から捉えるニーチェの主張に相反しないどころか、一致するのだと論じる（cf. GA6-1 112）。とはいえ、ハイデガーはあえて『判断力批判』の議論に深入りしない。さらに講義「認識としての力への意志」（1939年夏学期講義）においては、『カント』書が描いていた、理性の起源としての超越論的構想力の概念を、むしろニーチェとの対話の中で展開している。というのも、ハイデガーは、「理性の詩作的本質（das dichtende Wesen der Vernunft）は、カントが初めて彼の超越論的構想力についての教えの中で、固有に見たのであり、考え通したのである」（GA6-1 526）とした上で、「理性の詩作的本質」を看取するニーチェを、カントの延長線上に位置づけ、ここでこそ「理性は[...] 構想力そのものとなる」（Sie [die Vernunft] wird zur [...] Einbildungskraft schlechthin）と宣言するからである（GA6-1 527）。ここで、推論の能力と構想（想像）の能力が一つであることは、ニーチェの読解からこそ議論されることになる。本節では、なぜハイデガーが、『カント』書での構想力をめぐる議論を、『判断力批判』と結び付けることなく、カント以外の哲学者との対話において発展させるのか<sup>34</sup>、その理由を考察する。

すでに見たように、ハイデガーはカントの自己触発の概念を、時間を根源的に有限的な

<sup>34</sup> ただし、1935-36年フライブルク大学冬学期講義（『物についての問い』）も、或る意味では『カント』書の議論を受け継いでいる。とはいえ、超越論的構想力は完全に議論の背景に退き、むしろ、1927-28年のマールブルク大学冬学期講義以来の、「いかにしてア・プリオリな総合判断は可能か」という問題が、「物の物性」の問いとして、超越論的分析論第2篇「原則的分析論」第2章「純粹悟性のあらゆる原則の体系」の読解から、入念に論じられている。この章でカントは、「あらゆる総合判断の最高原則について」（第2節）、また、「純粹悟性のあらゆる総合原則の体系的表示」（第3節）について論じている。この第3節にて、「直観の公理」、「知覚の予料」、「経験の類推」（第一、第二、第三の類推）、「経験的思考一般の要請」が扱われる。ハイデガーのこの読解からあらわになるのは、「経験の類推」において、カントが再び「超越論的時間規定」（GA41 237）を論じているということである。すなわち、第一の類推（実体の常住不変性について）、第二の類推（因果性について）、第三の類推（相互性について）は、すべて時間の超越論的規定として理解することができる。ここで問題となっている時間の超越論的規定は、（越論的図式論において論じられた）時間系列・時間内容・時間順序・時間総括ではなく、常住不変性（Beharrlichkeit）・時間継起（Zeitfolge）・同時存在（Zugleichsein）（cf. GA41 234）である。よって、この講義は、時間の超越論的規定を媒介として、純粹直観と純粹思考概念の結合を論じるという意味においては『カント』書を引き継いでいる。さらに、「経験的思考一般の要請」の読解においては、カントにおける「可能性」、「現実性」、「必然性」の概念が、伝統的形而上学に対する革命を含蓄していることが論じられる。この革命は、これらの概念が、もはや単なる思考の次元ではなく、純粹直観との結合から、「存在」の次元で論じられるということに存する。ここでの議論は、後の「存在についてのカントのテーゼ」（1961年講演、1962/63年出版、GA9 445-480）へと結晶することになる。ハイデガーはこの議論にこそ、存在者と区別される「存在」をカントが見てとっていたことの証を再び見出すのである。cf. 長坂真澄「デリダと存在神学 ——カント、ハイデガー、レヴィナスの交錯する場所へ」『現代思想』43巻2号、2015年、308-321頁。なお、ハイデガーのカント解釈の変遷を、1925-26年『論理学』から後期に至るまで、包括的に俯瞰している文献として、以下のものがある。後藤嘉也「『カントと形而上学の問題』 ——『純粹理性批判』の問いを時間の地平から明らかにする」『ハイデガー本45』、平凡社、2001年、127-132頁。

ものとして捉える試みとして解釈する。しかし他方で、ハイデガーは、1927-28年のマールブルク大学冬学期講義から、繰り返し、カントにおいてはこの有限性が、いまだ十分には根源的でないことをも強調している<sup>35</sup>。この文脈でハイデガーが言及するのが、超越論的理想にほかならない<sup>36</sup>。ハイデガーにとって、超越論的理想を、確かに認識の対象とは認めないとはいえ、いまだ実践において措定するカントは、時間をほかならぬ自己触発そのものからのみ捉えることにいたっていないことになる<sup>37</sup>。ハイデガーのカント批判の要点は、カントが根源的有限性の哲学の可能性を展開しているにもかかわらず、その有限性をやはり実践においては無限との対照によって捉えていると主張することにある<sup>38</sup>。

ここで触れたいのが、崇高判断と目的論的判断である。ハイデガーは『ニーチェ』講義において『判断力批判』を高く評価しながらも、崇高判断や目的論的判断へと議論を展開しない。理由は、上述のことと関係していると思われる。『判断力批判』は、美の判断としての直感的反省的判断から出発し、崇高判断としての直感的反省的判断の議論を経て、目的論的判断としての論理的反省的判断へと通じる。これは、ハイデガーにとっては、いまだ（至高的存在者についての学という意味で）存在神学的・形而上学的であったと考えられる<sup>39</sup>。

ハイデガーは、カントの崇高判断や目的論的判断をめぐる議論が、自らの存在についての思索を展開する上で、すなわち存在神学としての形而上学の解体を遂行する上で、適していないと判断したのではないだろうか。理性を超越論的構想力として捉え直すハイデガーにとって、美の分析論のみが、受け入れられる範囲に属していたのではないだろうか。構想力を核概念として形而上学を解体するという企図は、カントよりも他の哲学者（ニーチェ）のうちに対話を求めることへとハイデガーを向かわせたと考えられるのである。

## 結論

以上、ハイデガーが『カント』書で示す解釈のうち、四点（1. ア・プリオリな総合判断についての超越論的図式論、2. 自己触発としての根源的に有限的な時間性、3. 感性と悟性

---

<sup>35</sup> ハイデガーによれば、カントにおける人間の「有限性は、なおもただ外的に、被造物として規定されている」（GA25 410）。

<sup>36</sup> カントは、「創造的直観」としての「根源的直観（*intuitus originarius*）」を基準に「有限的認識を査定している」とハイデガーは考える。つまり、カントの語る人間の有限性は、無限の実体から捉えられるものであることになる。「超越論的理想」こそが、人間の有限性を有限性として捉えるための基準となっているのである（GA25 416）。

<sup>37</sup> ハイデガーの見立てでは、カントは「産出的構想力」を「根源的に脱自的な時間性」として認めるにはいたらなかった（cf. GA25 418）。

<sup>38</sup> ハイデガーは強調する。「現存在の有限性は、ただ現存在自身からのみ示されうる」のであり、「創造神〔すなわち超越論的理想〕を前提する必要はない」と（GA25 155）。

<sup>39</sup> ハイデガーは、カント哲学は「プラトニズムの形態」に到達したとする。「超感性的なものは、いまや実践理性の要請となった」（GA6-1 208）。とはいえ、カントにおいて、目的論的判断（「この宇宙は…のためにある」、「私は…のために実存している」など）が論理的反省的判断であるということが意味するのは、判断において主語を包摂する述語が未規定的な理念であることであり、これはむしろカントの言う意味での「存在神学」（KrV A632;B660）の克服にほかならない。



の共通の根である超越論的構想力、4. 超越論的構想力として捉え直される理性）を確認した上で、これらの解釈が、『判断力批判』「美の分析論」において論じられる直感的反省的判断においてこそ、成り立ちうることを示した。ハイデガーが『カント』書にて存在了解として解釈した純粹認識判断と異なり、直感的反省的判断は、規定された概念を前提しない。つまりここでは、存在了解は、もはやいかなる概念をも前提とせず、認識ではない。ただし同時にそれは、あらゆる認識判断の前提となるものである。

たしかに、「これは美しい」（Das ist schön）という判断が下されるとき、そこでは、いかなる存在者からの触発とも異なる形で——つまりいかなる客観的実在性も伴うことなく——存在（“ist”）の生成そのものが出会われていると考えることができる。それは存在者を受け取る感性の働きによるのではなく、概念を形成する悟性の働きによるのではなく、むしろ両者の根源となる、超越論的構想力の働きによる。無から表象を産み出す産出的構想力があらかじめなければ、存在者を存在者として〈感じること〉はそもそも可能ではない。また、構想力がなす反省的判断によって概念が模索されることがなければ、一般的概念を〈考えること〉はそもそも可能でない。

このような解釈に基づくならば、ハイデガーが目指す存在への問いは、もはや、一般的概念によって説明可能な存在についての学——存在論——ではなくなることになる。直感的反省的判断が主観的判断にとどまり、いかなる客観性をも保証しない限りにおいて、このような直感的反省的判断において出会われる存在は、もはや客観的概念に基づく学の対象とはなりえない<sup>40</sup>。そうであるなら、学ではなく、構想（Einbildung） - 詩作（Dichtung）においてこそ、存在の運動そのものとの出会いが語られうることとなるだろう。最後に、ハイデガーがプラトン『パイドロス』の読解で語っている言葉を引用して、本論考を締めくくりたい。

「美は、我々に最も直接的に到来し、我々を魅惑する。それは存在者として我々を打ちながら、同時に、我々を存在への眼差しへと向かわせる。[...] 美は、存在忘却から我々を引き離し、存在への眼差しを与える。[...] それは存在を光り輝かせる [...]」（GA6-1 199f.）。

Masumi NAGASAKA

### ***Eine gemeinsame Wurzel von Sinnlichkeit und Verstand***

— *Der Kreuzweg von Heideggers »Kant und das Problem der Metaphysik«  
und Kants »Kritik der Urteilskraft«*

<sup>40</sup> ハイデガーとは独立に、カント『判断力批判』の現象学的解釈から、独自の現象学を打ち出すリシールにおいて、我々は同様の議論を見出す。「この概念なき反省的判断 [...] は、単独の主観（或る個人）によって表明される、単独の対象（芸術作品）についての判断である。それはこの対象が、普遍的に、すなわち、至る処で常に、あらゆる可能な個人にとって美しいと表明する。とはいえ美しさは、概念による認識の対象には決してなりえない [...]」（Richir, Marc, « De l'individu et du voyage philosophique » (in: *Passé Présent*, n° 1 : *L'individu*, Paris, Ramsay, décembre 1982, pp. 84-98), p. 89)。